



クリニック、病院外来、救急、在宅、 その全てを自らの手で

2013年7月取材

石川県七尾市
横山内科皮膚科医院 副院長
横山 将嘉 先生

2009年10月、横山将嘉先生は義父で院長の横山文男先生が開設した皮膚科診療所に内科を併設して、横山内科皮膚科医院を開設しました。その一方で、先生は地域の基幹病院である公立能登総合病院の専門外来も担当するなどして、地域に包括的な医療を提供するため、積極的な活動を続けています。

一人の患者さんを診続けていくために

横山先生は自院での診療とともに、開業前に勤務していた公立能登総合病院での週3回の外来診療に加え、月2回は同病院で夜間救急外来の当直を担当。さらに、毎週水曜日の午後は自院の訪問診療に充てています。このような多岐にわたる診療活動について、「一人の患者さんをずっとケアしていくことを考えると、当院だけで完結させるのは難しく、病院での検査や入院、さらに在宅診療も必要になってきます。これらを地域連携でカバーしていく選択もありますが、私自身は全てに携わることができる環境にあるので、このような形をとっています」と言う横山先生。例えば、同院の患者さんに入院治療が必要になれば、同病院へ移しますが、診療はそのまま横山先生が担うというわけです。



受付と待合室のスペースを挟んで、写真の奥側に内科、手前側に皮膚科の診察室が設けられています。

糖尿病治療では「やる気」を引き出すことを念頭に



明治時代から続く医師の家系を継いだ横山先生。昔の診療所に掛けられていたという年代物の時計が、その歴史を物語っています。

金沢大学附属病院恒常性制御学講座(旧第一内科)や米国のコロンビア大学医学部で糖尿病や代謝学の研究にも携わってきた横山先生は、公立能登総合病院では糖尿病や代謝内科の診療を担当しており、同院にも多くの糖尿病患者が通院しています。「糖尿病自体は自覚症状もなく、患者さんにしてみれば、単に血糖値という数値で示される疾患です。このため、治療の中断率がどうしても高くなります。特に診療所に通っているような、比較的軽症の患者さんの場合、『まあいいか』と途中で放棄する例が少なくないように感じますね」と語る横山先生。可能な限り全ての患者さんをドロップアウトさせたくないという思いから、診療時にはできる限り時間を掛けて患者さんの話に耳を傾け、改善への努力を認め、励ますことで治療への意欲を喚起するよう努めていると言います。

地域における診療情報の共有を切望

地域医療をトータルに取り組む理由の一つとして、横山先生は患者さんの情報を一元管理して診療できるメリットを挙げます。医療連携においてもこの点を重要視しており、具体的には「患者さんの情報、つまりカルテを共有するネットワークをつくって、適切で迅速な検査や治療に生かすことが必要ですし、現在、公立能登総合病院と連携し、電子カルテネットワークシステムを構築中です」と話す横山先生。クリニックでの一般診療、総合病院での専門外来診療および病棟管理、夜間救急診療、在宅医療など、この地域に必要な医療をその業態にかかわらず、網羅的に、精力的にこなしています。「医師としてできること」を追求し、自分に課していく姿勢が今の活動を支えているようです。



クリニックのシンボルマークは横山先生自身が考案。「日本海側ですから朝日は山から昇るんですね」とデザインにオリジナリティーを込めています。